

「遊び」を探求した稲川東一郎の創造性

はじめに

桐生高校の野球部で長く監督を務めた稲川東一郎氏(1905~1967 年)は詳細なデータを活用した細やかな戦術や科学的トレーニングをいち早く導入した「知将」として知られ、選抜高校野球での準優勝 2 回などの戦績を残した。

地方の公立校を東日本で有数の甲子園常連校に育てた彼の人生からは、野球という「遊び」に真正面から向き合い、甲子園優勝を達成しようと執念深く試行錯誤を続けた姿が見て取れる。大好きな野球を突き詰め続けた先に、既存の常識から「逸脱」して新たな常識を生み出し、結果を残し続けた姿には、現代のメジャーリーグ(MLB)で活躍する大谷翔平に共通する「純粋さ」と「先進性」を感じることができる。

監督としての実践内容や思考方法は単なる野球の話としてだけでなく、AI の進化によって「人間でなくてもできること」の範囲が広がり続ける令和の時代に、自分がやりたいことを「探求」した先にある「探究」を考える良い教材になる。

今回は 2022 年に始まった「球都桐生プロジェクト」の一環として、残された資料や書籍、OB へのインタビューなども踏まえ、まもなく没後 60 年を迎える稲川氏の「創造性」を再考したい。

「球種、コース、高低」のデータを取得した 1958 年のスコアブック

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
得点	0	0												
安打	0	0												
エラー														
盗塁														
犠打														
犠飛														
三振														
四球														
暴投														
投手	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子
打者	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子

1958 年の桐生高校のスコアブック

<https://vk.sportsbull.jp/koshien/game/1958/400/6615/>

2 回戦の魚津 vs 明治。3 回戦で桐生は魚津に敗れた。

まずは 1958 年の桐生高校のスコアブックから見てみよう。この写真は甲子園で実践された「先乗りスコアラー」のスコアブックだ。当時、桐生高校のスコアラーは次の対戦相手である富山県の魚津高校・村椿投手の投球を詳細に分析していた。特筆すべきは、単なるスコアの記録に留まらず、1 球ごとの高低、コース、球種までが丹念に書かれている点だ。

例えば 1 回表の 1 番・金子の打席、通常のスコアで読み取れるのは「ライト右側へのライナー」までだが、その隣に「直外ベ」とある。これはおそらく「結果球（見逃し、空振り、ボール、ファウルではなく『打席結果』となった球）が外角ベルトの高さへの直球」だったことを示している。同様に、2 番・羽鳥は「内角ベルトの高さのドロップをセンター方向へゴロを放ち、ショートへの内野安打」と読み取れる。

投球を球種ごとに「コース×3、高低×3」の9分割に分けて分析する手法は、令和のプロ野球でも各球団で行われている。その起源は1970年に南海ホークスで選手兼監督となった野村克也氏と、スコアラーの元祖と言われる尾張久次氏で、尾張氏の1984年の著書「尾張メモの全貌：情報は盗んで活かせ」には「(1970年に就任した)野村克也監督からの要請もあって、私は9等分のストライクシートを考案した」という旨の記述がある。

尾張氏は毎日新聞の記者から1954年に南海のスコアラーへ転身しており、日本のプロ野球で初めてスコアラーとして雇われたスタッフとされている。1965年4月19日号の「週刊ベースボール」での尾張氏の特集記事では「投手の投げるタマを外角、真ん中、内角の三コースに分けて…」と球種とコースのみで分けて記録、集計している旨の記載がされており、この記事では高低の概念は入っていない。

1980年代以降は解説者となっていた野村氏のメディアでの影響が強く、野球のテレビ中継の中でストライクゾーンを用いて配球を解説する「野村スコープ」という企画が行われ、野村氏がヤクルトの監督として現場復帰した後の1990年代は、インポート・データ(Import Data)という造語の略である「ID野球」というワードがメディアでもたびたび登場した。95年の日本シリーズで当時オリックスのイチローを封じた心理作戦は、ID野球を象徴する出来事だった。

この時代になると、配球データの取得と集計にも技術革新が起こっている。手書きのスコアブックではなくパソコンでデータを入力して9分割の表に分析結果を出力する「株式会社アソボウズ」のソフトは95年のヤクルトも活用しており、ID野球を支えるシステムとなっていた。その事業を継承した「データスタジアム株式会社」によって、2000年代にはデータを記録、分析するソフトの活用が広まり、各球団に欠かせないツールとなっていた。プロ野球ではこの時期にほぼすべての試合がケーブルテレビ等で中継されるようになったことも、データ取得の難易度を下げる重要な要因だった。

MLBの影響もあり2010年代以降は投球の軌道を自動で取得する「トラッキングシステム」が普及。各球団で専門家を雇い、さらに細かな分析が行われているが、パソコンとソフトがあれば元選手のスタッフでも簡易的に記録ができる9分割の表は配球分析のスタンダードとしていまでも広く使われている。

桐生高校のスコアブックには詳細なデータをただ記録して見返すだけではなく、投球の分類ごとに集計して分析していた形跡もある。パソコンやスマホはもちろんのこと、家庭用のビデオカメラすらまだ存在しない時代に、これらのデータを記録し集計することがどれだけ大変だったか。その苦勞と執念は計り知れない。

稲川氏はこれらのデータを活かしたポジションングやエンドランに加え、「スイッチヒッター」の育成や「代打の代打」など、先鋭的な戦術、作戦を実行していたとのこと。先ほど紹介した日本プロ野球でのデータ分析の歴史的経緯を踏まえても、1958 年時点での桐生高校、稲川氏がいかに時代を先取りしていたかが分かる。

1958 年のプロ野球はいまに続くセ・パ両リーグ 6 球団ずつの体制が始まった年であり、2025 年 6 月に亡くなった長嶋茂雄氏が巨人に入団した年でもある。この年の 4 月に今も続く雑誌「週刊ベースボール」が月刊誌から週刊誌に変わる時期でもあり、プロ野球はまさにこれから黄金期を迎える夜明け前だった。

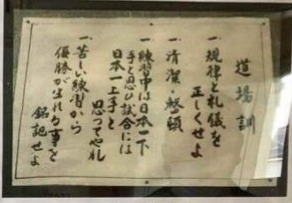
1978 年に出された桐生タイムス文庫の「山紫に 桐生高等学校野球史」では、稲川氏には戦前に阪神タイガース、戦後にも東映フライヤーズから監督のオファーがあったという話が掲載されており、プロ・アマ問わず日本有数の戦術家として評価されていたことがうかがえる。

野球道場で「ボディ・ビル」をさせていると語る 1960 年のインタビュー

敬道館野球道場 昭和29年～46年



敬道館入口



敬道館道場訓



新道場階段
S41年6月1日完成

昭和29年、桐生市本町に敬道館（後に修道館）野球道場を創設。手狭になったため、昭和37年には桐生市浜松町内に2代目の道場が完成する。昭和47年に桐生高校校庭に雨天練習場が建設されるまでの間、この道場で桐高野球部員は日々猛練習を重ねた。
なお、稲川監督の野球に対する情熱が詰まったこの道場から、大学、社会人、プロ野球界へ数多くの優秀な選手が巣立っていった。
「球都桐生」の歴史を語る上で、欠かすことのできない存在である。

稲川氏は戦術だけでなく、ウェイトトレーニングの導入や自宅を改修して作った野球道場など、様々な面での選手の育成、強化にも独自の取り組みを行っていた。

週刊朝日臨時増刊 1960 年 8 月 15 日号のインタビューでは、野球道場「敬道館」(後に修道館と改称)とウェイトトレーニングに関する記載がある。内容を一部抜粋すると

「わたしのところでは昭和 29 年(1954 年)から自宅に野球道場をつくった。はじめは一間だけだったが、いまでは二階を合わせ八間を開放している。上州名物の『からっ風』と雨で 4 ヶ月間、外で練習ができない間、ボディ・ビルやピッチングなどを練習させるため、効果は上がっている」

とのことだ。今の時代では様々な研究が進められ「投手の球速や打者の打球速度を向上させることは勝つために重要で、そのために除脂肪体重、筋肉量を増やすことが必要」という知見はあるが、戦後間もない時期の高校野球の監督から「ボディ・ビル」という単語が出てくるのは興味深い。

先述した桐生高校野球史によると、稲川氏の野球道場には、基礎体力の向上のために「バーベル、エキスパンダー、跳び箱」などの用具があったという。また、稲川氏を支え続けた元子夫人はこの道場での合宿に合わせて調理師と栄養士の免状を取得し、生徒の健康管理・栄養管理に万全の対策を取ったともある。実際に道場が完成した 1954 年の 12 月末から 3 ヶ月間、合宿を行って翌春の第 27 回選抜高等学校野球大会に備え、甲子園では見事に 2 度目の準優勝を果たしている。

桐生高校野球史には他にも、道場内にネットを張り「ピンポン球で変化球打ちを覚えさせた」という打撃技術の向上に関する取り組みも記載されている。「実戦の軌道に近い球を打つ」という練習は今でも多くの野球部で行えていない点で、自分も今年、ここ数年増えている民間の野球塾、トレーニング施設に見学に行った際に、プラスチックの球で変化球を簡易的に再現して打撃練習を行えるマシンが新しく導入されているところを見た。実戦でトップレベルの相手が投げてくる変化球は通常の打撃練習では再現することが難しく、現代でも試行錯誤が続いている領域だ。

また、週刊朝日増刊 1967 年 8 月 15 日号での「野球一筋にささげた執念の人生」という稲川氏追悼の特集記事ではこの野球道場での合宿生活について「壁には選手ひとりひとりの欠点と目標にすべき点が貼り出されている『〇〇君、バントがまずい。スローイングも練習せよ』といった具合だ」と書かれており、画一的な指導ではなく、個別具体的な目標を設定し、指導をしていた様子もうかがえる。

1954年に卒業したOBで、東映フライヤーズで長きに渡り活躍した毒島章一氏は桐生高校野球史の中で、稲川監督の話について「手ぶり身ぶりで話もうまく、むずかしい話ではない。その一つ一つが知らず知らずのうちに体にしみついて、社会人となってからどんなに役に立ったことか。」と語っている。個人に合った指導を实践する上で、指導者の感覚を共通言語に落とすことは大きなポイントだが、稲川氏はこの能力も高かったのだろう。

ただし、稲川野球も基本的には稲川氏が管理し「スパルタ」な強化と見られていたことは追記しておく。前述の桐生高校野球史にも、稲川氏が急逝したあとを引き継いだ中村茂監督の「スパルタから納得のいく科学的なトレーニング、職人野球から教育の一環としての野球」という方針転換が当時の校長からも全面的に支持されたとあり、稲川野球を「科学的」と捉える人は少数だったのだろうと思われる。

今回は個別に、1960年代に稲川氏から指導を受けたOBの方に直接インタビューをする機会もあり、その中では「機器はあったけれどウエイトトレーニングをしていたのはごく少数だった」という旨のコメントもあった。

1955年の選抜高校野球での準優勝以降、必ずしも細かく目標値を設定してウエイトトレーニングや栄養管理を行っていたわけではなかったようだが、少なくとも戦術だけでなく、コンディショニングやストレングス、さらには具体的な技術の重要性を実感し、実践できる環境を整えていたことは事実だろう。

「革新を生む辺境」としての球都・桐生市

1957年までの学校別全国高等学校野球選手権大会試合数ランキング

試合数順位	学校名	都道府県	試合数	勝率	優勝数
1	平安	京都	44	.727	3
2	和歌山中	和歌山	39	.641	2
3	松山商	愛媛	35	.686	2
3	早稲田実	東京	35	.486	0
5	鳥取西	鳥取	34	.529	0
6	中京商	愛知	33	.909	5
7	北海	北海道	28	.321	0
8	松商学園	長野	27	.556	1
9	広島商	広島	23	.826	4
9	岐阜商	岐阜	23	.783	1
9	小倉	福岡	23	.625	2
12	市岡中	大阪	20	.550	0
13	海草中	和歌山	19	.737	2
13	静岡	静岡	19	.421	1
13	敦賀	福井	19	.316	0
16	慶応	東京、神奈川	18	.500	1
17	高松商	香川	17	.706	2
18	呉港中	広島	16	.688	1
18	秋田	秋田	16	.313	0
20	熊本工	熊本	15	.733	0
20	浪華商	大阪	15	.467	1
20	桐生	群馬	15	.333	0

※週刊朝日臨時増刊 1958年8月15日号 P28の集計内容から一部抜粋

※1957年の第39回全国高等学校野球選手権大会までの集計

※平安は現・龍谷大平安、和歌山中は現・桐蔭、中京商は現・中京大中京、
岐阜商は現・県岐阜商、市岡中は現・市岡、海草中は現・向陽、
呉港中は現・呉港、浪華商は現・大体大浪商

※15試合以上を対象

1958 年の第 40 回全国高等学校野球選手権大会の展望号に、東京大学の硬式野球部の監督を務め、野球に関する多くの著書を残した神田順治氏による夏の全国大会での本大会全出場校成績表が記されている。上の表はそのデータを一部抜粋して加工したものだ。

桐生高校は 1957 年までの 39 回の選手権大会で 15 試合を行っており、試合数は全国 20 位タイ。この表の 22 校の中で、東京も含めた関東地方の学校は「早稲田実」「慶応」「桐生」の 3 校のみ。19 世紀から日本の野球文化を創ってきた早慶と地方都市の公立進学校が肩を並べているわけで、これは当時すでに桐生高校の監督として長いキャリアを築いていた稲川氏の功績にほかならない。

桐生高校野球史に「一時、定時制の部員が半数近くいた」という記述があるように、戦後は近隣の県からも選手をスカウトしていた野球部を普通の公立進学校の部活動という枠で語るべきではない気はする。ただ、1953 年からは選手権大会の NHK でのテレビ中継も始まり、大衆娯楽に限られる中で今以上に高校野球が社会現象となっていた時代背景も踏まえると、桐生市が当時から「球都」として注目されていた意味は頷ける。

ただし、桐生高校の当時の選手権での勝率は .333 で、この中では秋田 (.313)、敦賀 (.316)、北海 (.321)、桐生 (.333) と、下から 4 番目の低さであった。この後、1962 年に作新学院(栃木)が春夏連覇を果たして大旗が「初めて利根川を越えた」のだが、当時は北陸、北関東、東北、北海道がいに夏の選手権で苦戦していたかが分かる。

なお、勝率下位 4 校の中で最も試合数が多いのは北海道の北海高校。当時率いていた飛沢栄三氏は 40 年近く監督、部長として北海野球を築き上げ、稲川氏と同時代に知将と呼ばれた一人だ。

飛沢氏も積極的なデータ活用を行っており、1995 年にまとめられた「北国に光を掲げた人々 北海道高校野球の父 飛沢栄三先生」には、飛沢氏のデータ収集について「投手の投球の種類が『ストライク』とか『ボール』とかだけではなくて『直球の 1、2、3...』『カーブの 1、2、3...』のように実に細かに記録されています。」との記載がある。

ここでの 1、2、3 はコースを指すのだろうか。詳細は定かではないが、桐生高校のスコアブックに記載されている「直外ベ(直球、外角、ベルトの高さ)」に似た意味があるのだろう。「北海野球部百年物語 北の球児、闘いの記録 : since 1901」という北海の野球部史には 1916 年時点ですでにスコアラーという役割が明記されており、スコアをつけてデータを集め、相手を分析するということは伝統的に行われていたようである。飛沢氏も 1963 年の選抜高校野球で準優勝を果たしたが、甲子園での全国優勝には届かなかった。

稲川氏が亡くなった 1967 年 4 月の 2 ヶ月後に飛沢氏も亡くなっており、前述した 1967 年 8 月の週刊朝日の追悼特集は「もう見られぬ稲川東一郎氏(桐生)と飛沢栄三氏(北海)」として、2 人が取り上げられている。

記事中で「豪快で親分肌、面倒見の良い稲川氏と、思ったことはズバズバ言う直情径行な性格だったという飛沢氏、野球の内容や性格はだいぶ違った」という記述はあるが、どちらも野球が決して強くはない土地で、半世紀近くに渡り一つの学校で監督を務め、創意工夫を続けて全国に挑戦してきた共通項は強くあった。

「イノベーションは既知の常識を変えづらい中央ではなく、弱いネットワークを持つ辺境からの越境者の方が生み出しやすい」という経営学の理論もあるが、日本野球界の中央ともパイプを作りつつ、辺境から挑戦を続けたことで、稲川氏や飛沢氏は今に残る革新的な取り組みを続けられたとも考えられるだろう。

五輪書を師として、野球を「まるごと」捉えた

試合で勝つための課題対象を構造的に捉える



上の図は野球の試合で勝つために取り組むべき課題をコーチング学やトレーニング学、スポーツパフォーマンス分析の研究を元に単純化したものだ。

稲川氏の取り組みで興味深いのは、監督として相手の長所や弱点を調べ上げ、試合中の作戦を細かく遂行するという点のみならず、そもそもの野球のルールや高校野球独自の環境、さらに選手のパフォーマンスを発揮するための土台となる技術、体力、身体形態、精神状態、生活習慣などのいわゆる「パフォーマンス前提」の強化も含めて野球を網羅的に捉えていたことである。

その考え方の中核となったものは、ボロボロになるまで読み込んだという宮本武蔵の「五輪書」にある。今回インタビューさせて頂いた野球部 OB の方からも「稲川先生に野球を教えてもらったことよりも、五輪書の話、社会での生き方を学んだことのほうが思い出深い」という話があった。

五輪書は戦国時代末期から江戸時代初期にかけて活躍した剣豪・宮本武蔵が長年の実践と考察を通じて到達した兵法の奥義を、五つの巻に分けて体系的に記述したものである。この書は単なる剣術の指南書ではなく、人生における「道」を追求する普遍的な哲学書として位置づけられている。

ここで五輪書の詳細には言及しないが、ポイントは「全体性」と「プロセス」の重視だと指摘できる。1969 年にみやま文庫から出版された「群馬の高校野球」の中で、稲川氏と五輪書に関する興味深い内容が書かれているので、いくつか引用しつつ、考察したい。

稲川氏について書かれているのは「一時期を画した稲川監督」という見出しの箇所で、稲川氏と五輪書の関係について「昭和 12 年(1937 年)に発刊された教林社の五輪書を片時も手放さなかった。稲川にとってかけがえのない野球の師匠であった。武道を野球の勝負に置き換えて考えたからである」との旨が記されている。

大きな太刀を好む流派などの他流派の兵法を分析し、自流の優位性を浮き彫りにする内容が記された「風の巻」への稲川氏の書き込みから「他チームを知らずして敵は倒せぬことに通ずる」「強打攻撃だけのチームは恐れるに足らず」と考えたと分析し、勝負の世界をきびしく追求した「勝負師」としての顔について「五輪書を開くときに何か理解できるような気がする」としている。

そして、晩年の稲川氏を「選手に一応使えるだけの技術を身に付けさせる『職人』と、統計に対して人一倍興味を持って細かな作戦図を描き、選手をチェスのコマのように動かす『勝負師』という二つの面がある」と評し、「稲川野球の性格の多様性」ゆえに多くの野球関係者が稲川氏の元に教えを請いに來たのも当然だっただろうと考察している。

五輪書の心得を常に頭に叩き込み、野球で勝つための様々な研究と実践を繰り返していた稲川野球は、今でいう「スモールベースボール」として捉えやすい。しかし、それはあくまでもトーナメントの高校野球で勝ち上がるための手段のひとつであり、決して選手のパフォーマンス前提をおろそかにしていたわけではない。

実際に、稲川氏が戦後の昭和 20 年(1945 年)代に重視していたこととして基礎体力の養成が挙げられ「群馬には大型の選手がいない。投手において、その最もたるものだ、と悩み続けてきた稲川は、(様々なトレーニング機器を導入したのは)基礎体力養成で、スケールの大きいチームを作りたかったからである。

『基礎体力の上にこそ、細かい技術が生かせる』と言っていたことを思い出す」とも書かれている。ここまでの話を総合しても、基礎体力が意味するところは、昔ながらの「走り込むことのできる力」ではなく「筋肉量」「体重」など身体組成の意味が多分に含まれていると考えられる。

また、五輪書は稲川野球での「心構え」にも大きな影響を与えている。

先ほど紹介した 1960 年の週刊朝日増刊のインタビュー記事にも「選手にはいつも『学生らしく正々堂々やれ』と伝えている」という記述がある。具体的には「かくし球」に言及しており「いつの大会だったか、かくし球でアウトになったプレーがあった。これをみたファンが怒ってピンを投げ、その破片にあたって娘さんが顔を切ったことがあった。

それ以来、私はうちの選手には絶対こういうプレーはさせないようにしている」とのことだ。OBの方へのインタビューでも「稲川監督からはかくし球や卑怯なことは絶対だめと当時から言われていた。今、子どもたちに指導する際もその点は厳しく言っている」という話を聞いた。

稲川野球はときに「桐生は勝負には強いが、やり方はきたない」と批判され、相手をいらいらさせる宮本武蔵さんからの作戦を遂行する姿は、決して対戦相手やそのファンから良く映らないことも多かったようだ。「代打の代打」を使った際には高校野球らしくないとの批判が寄せられたという。当時のライバルチームが稲川野球を「正々堂々とした野球」と思っていたかはだいぶ怪しい。

プロ野球でもデータを活用する野球は当時から異端の目で捉えられがちで、例えば 1964 年の週刊ベースボール「矢形スコアラーと西本監督の秘密通話」という阪急のスコアラーに関する記事では「各球団のスコアラーがネット裏に陣取って、相手投手の投球内容をスパイするのは常識になっている」との記述がある。

この記事は阪急が最新のワイヤレスマイクでネット裏のスコアラーからベンチにリアルタイムで情報を送っていること(当時のパ・リーグでは無線機を使って試合中にベンチに情報を伝達することが「違反ではなかった」とのこと)に着目したもので、確かに「スパイ」という言葉を使いたくなる気もする。

この後の野村氏の ID 野球でも、揶揄する意味で「スパイ野球」と表現する書籍や記事が出ており、相手のデータを分析して試合に活かすスタイルは、観客や相手チーム、メディアにとって必ずしも好印象に映らない。

相手の長所、短所を調べ、細やかな作戦を実行する野球は一見すると「正々堂々」と捉えられず、稲川氏に二面性があるように思えるが「敵を倒し、生き抜くための兵法を学ぶ心構えとして、まず第一によこしまな心を起こさず、正しいことを考えること」という五輪書の戒めを抛り所にすると、矛盾のない解釈ができる。

つまり「エンドラン」「代打の代打」「スイッチヒッターの育成」「頻繁なポジション変更」「打者が打ち気ときはプレートを外す」などは相手の力量と自分の力量、刻々と変わる状況を把握、比較したうえで現在最適と思われる策を取ったという作戦だが、隠し球は相手を欺くということで自チームに利を得ようという行為であり、ここには明確に違いがあるということだ。一時的な利益を得ようと相手を欺く行為は学生らしい行動ではないし、そもそも勝利し続けるという目的を達成するための行動ではない。少なくとも稲川氏はこのように考えていたと思われる。

公認野球規則の冒頭にも「各チームは、相手チームより多くの得点を記録して、勝つことを目的とする」という項目が記されている通り、野球の競技そのものを探求する上で、どのようにして勝つかを追求することは重要だ。稲川氏は五輪書を参考に野球を俯瞰して捉え、目的を達成するために、その過程を重視した指導者だったと考えられる。野球道場や数々の戦術は副産物として生まれたに過ぎない。この部分が、稲川氏の現代にも通じる大きな魅力なのではないか。

原動力は「無類の野球好き」

それでは、なぜ稲川氏は野球をまるごと捉え、現代でも通じる考え方を実践するに至ったのか。先ほど紹介した「群馬の高校野球」では稲川氏について、次のような記載がある。

「昭和 20 年(1945 年)8 月 18 日、桐生の校庭で 2、3 個のボールとバットを持った稲川が姿を見せた。 ～中略～ そして、数人の生徒を相手にキャッチボールを始めたのには、野球

に熱心な桐生市民もさすがにあっけにとられた。終戦三日目なのだ。人々は口々に稲川を『野球気違い』と叫んだ。無理もなかった。」

この話が象徴するように、稲川氏に関する資料や桐生高校 OB のインタビューからは、無類の野球好きというエピソードがまず出てくる。

「もっと野球を好きになろうって言われたって、おやじほど好きにはなれねえよと思った」とは晩年の稲川氏に指導を受けた OB の当時の思い出話だ。稲川氏が 40 年以上も桐生高校野球部の指導に関わり、桐生市が今につながる「球都」となったきっかけは、野球がとてつもなく好きなひとりの男がいたという、とてもシンプルな話に帰結する。

稲川氏が「40 年以上、指導に関わった」と書いたが、監督に就任したタイミングがいつなのかは諸説あるようだ。週刊朝日臨時増刊 1960 年 8 月 15 日号のインタビューでは「野球部の監督になったのは大正 12 年(1923 年)のこと」と話しているが、「群馬の高校野球」では、新聞等の過去の文献や関係者の話を総合すると「桐生の野球に積極的に稲川が采配を握るようになったのは、昭和 8 年(1933 年)ごろではなかろうか」とされている。

そもそも稲川氏は同校 OB で、1917 年に開校したばかりの桐生中学(現・桐生高校)に 1918 年に進学。1920 年から校内の仲間と野球を始めていたようだが、正式に野球部として認められ、初めて夏の甲子園につながる公式戦に出場したのは、稲川氏が最上級生となった 1922 年だったようだ。桐生中卒業後も定職につかず、母校の野球部に入り浸る生活だったとのことで、戦後に群馬県議会議員としても活躍する実業家の父親から一時勘当されるほどの熱の入れようだったらしい。

この頃の稲川氏の野球部との関わりは、後年に本人が話している通りの「監督」としての関わりだったかは定かでなく、応援団的なポジションだったという。「群馬の高校野球」では「古い人の話の中にも、そうした応援団長的な稲川と監督としての稲川の両面が交錯している例が多く聞かれる」とも書かれている。

桐生高校野球史では 1924 年に稲川氏が「私財を出してバックネットを寄贈した」とも書かれているが、このお金は果たしてどこから出たのか。父親から勘当されたあとは新聞配達をして野球部の手伝いに通うなど、ギリギリの生活だったそうだが、実家や夫人のサポートなども含めて、稲川氏が「野球好き」を貫いてもなんとか生きていける環境があったことは確かだ。

桐生高校で当時主将を務めていたある OB の方の話では、普段褒められたことはないのに、学校外の関係者が集まる場では「この生徒は素晴らしい主将です」と稲川監督が自分を

褒めるのだという。稲川監督曰く「桐生高校の生徒は社会に出て様々な人に動いてもらう仕事をする役割になるのだから、対外的な場で自分の配下の人間を褒めることは大切だと伝えたかった」とのこと。このような人心掌握術、マネジメントはその後、企業に勤める中でとても役に立ったとのことだった。

稲川氏が直接父親について詳細に言及している資料は見当たらなかったが、経営者であり政治家となる父親から、社会を俯瞰して見る視座を学んだ部分も多くあるのだろう。

ただし、無類の野球好きと少しばかり自由な環境があるだけで、40年以上も一つのことにこだわり続け、突き詰める行動ができるわけではない。今回多く引用した野球部史と週刊朝日増刊の稲川氏の追悼特集に共通している見出しの言葉は「執念」。今日まで続く球都桐生の礎を築き上げたその執念に敬意を表したい。

稲川監督と大谷翔平の創造性

以上、桐生の伝説的存在である稲川監督が仕掛けた数々の野球の取り組みについての先見性を、野球のパフォーマンス構造を踏まえて再解釈した。

稲川氏は中学時代に出会った野球にのめり込み、卒業後も応援団的な存在として、一時実家から勘当されてまで野球に関わり続け、そのまま監督に就任。第二次世界大戦の終戦後わずか3日目にキャッチボールを始めた。戦後は実家を改築して野球道場にし、生涯にわたり野球のパフォーマンス向上のために様々な工夫を試みていた。その試みの中核には五輪書による心得があり、稲川氏の考え方そのものは現代でも通じる部分が多い。

結果として桐生高校は昭和の時代に関東屈指の強豪校となり、桐生市は球都と呼ばれるまでになった。稲川氏の没後半世紀以上経った現在でも、球都桐生プロジェクトが起こるなど、野球が街の歴史と切り離せない大切な文化資産となっている。

これは野球という「遊び」を探究し続けた一人の男の行動が、街の文化を創造するきっかけとなったと言えるのではないか。

「遊び」の研究を発展させたフランスの社会学者ロジェ・カイヨワはその主著『遊びと人間』において「自由で日常生活から隔離された非生産的な活動である『遊び』の世界が現実と混じり合う場合、かつては楽しみとしていたことが、いまは固定観念(妄執)となる。逃避であったものが義務になる。気晴らしであったものが熱情となり、執念となり、不安のもととなる」との旨を述べている。

確かに、稲川氏もその初期は日常の労働からの逃避としてあったはずの野球が、監督として甲子園への出場を重ね、五輪書を師とし、自宅を練習場にしていく過程の中で、日常生活の大部分を占めるようになっていく。稲川氏が生涯、野球を「遊び」としてのみ捉えられていたとは考えづらい。

一方で、晩年まで衰えなかった研究心には、自由で非生産的な活動として野球を捉え続けた純粋さが見て取れる。野球の競技から離れたところでの生徒への面倒見はとても平等だったという OB の話からも、試合に勝とうとする本能を試合の外にはあまり持ち出していなかったようにも見える。稲川氏にとっての野球は最後まで「子どもの頃から大好きだった遊び」の要素を濃く残していたのではないか。

現代で「無類の野球好きで、純粋に野球の探求を続けている野球人」と聞いてまず思いつくのはロサンゼルス・ドジャースで活躍している大谷翔平だ。メジャーリーグ（MLB）でこれまで 3 度の MVP に輝き、2024 年には念願のワールドシリーズチャンピオンにも輝いた野球界の至宝は、その圧倒的な成績だけでなく、30 歳を超えても純粋に野球に向き合い続ける姿が老若男女のあらゆる層から支持を得ている。

大谷もまた、野球のパフォーマンス構造をまるごと捉え、最新のスポーツサイエンスの知見を常に吸収し続けている。2025 年には雑誌「Number」でのインタビューで「データに対して解を知る」話を語っており、普段のインタビューでも機械学習の技術を用いて投球の軌道データや投球位置のデータから球質を数値化し、打者の打ちづらさを測る「Stuff+」という指標についての言及があったという。

大谷は世界最高峰の職業競技者であるが、今まで誰も成し遂げたことのない世界を創造し続ける言動、行動には自由で非生産的な「遊び」としての野球の要素が多く残っていると思われる。

自由な活動としての「遊び」は既存の方法からの「逸脱」を生む。機械が言語能力を獲得し、単純作業のみならず事務作業を代替できるようになってきた 2025 年の世界。今後はさらに AI でできることが増え、今まで必要とされてきた日常生活での定型作業が徐々に AI で置き換わっていく未来が想像できる。これまで以上に人に創造性が求められている時代に、稲川氏や大谷の「遊び」を追求して新しい常識を切り拓いた実績はとても参考になるだろう。

スポーツは社会とつながることが求められている

2020年代に入り、高等学校で「総合的な探究の時間」が必修化されるなど、教育の中で自分の在り方や生き方を考えながら、課題を発見し解決していく力を育むカリキュラムが整備されてきた。ここで使われる「探究」という言葉は、個人の興味や欲求に基づく主観的な「探求」とは異なり、物事の本質や構造を論理的に明らかにし、他者と協働しながら課題に取り組む姿勢を含んでいる。そこには、技術革新により変化が激しい現代社会において、生徒が価値を創造し続けられるような力を身につけるという意図が込められている。

だが、本当に意味のある「探究」が育まれるかどうかは、一人ひとりの内側にある「探求心」が尊重され、生かされるかにかかっているはずだ。稲川氏や大谷も決して社会問題の解決手段として野球に取り組んでいたわけではなく、ただ野球での活躍、勝利を探求しているものだと思うが、結果として彼らの行動は社会の中で意味を持ち、様々な人へ影響を与えている。本人が特に意識せずとも、自己目的的な「探求心」が「探究」に昇華していると考えられる。

個人的には、社会問題への理論的な正解を導くには、いずれ「AIとAIを高度に使いこなす少数の人間との協働が良いと判断される時代がくる」と考えている。そのとき、誰も取り残されない社会を実現する上で個々の人間に必要とされるのは、社会の問題を認識する以前に「あなたは何に惹かれ、何を追い求めているのか」という「意志」、英語でいうところの「will」だろう。

スポーツを含めた様々な文化に取り組むことは本来、自己目的的な活動であり、内発的な動機を引き出すきっかけとして機能しやすい。集団活動の中で協働し、競争や規律を学ぶといった従来の効果だけでなく「探究」の原点となる「探求心」を育むという観点からも教育的な価値がある。

一方で、好きを突き詰める活動は時に独善的になりがちで、気づかないうちに社会を円滑に運営していくための規範から外れていることも多く、たびたびそれが問題になる。日本での野球のように選手、関係者を大勢巻き込むスポーツであればあるほど、その影響は大きい。桐生高校でこれだけの功績を残した稲川氏に関しても、急逝後に野球部の方針がそのまま受け継がれてはいない。それは当時の地方の公立進学校、高校の監督という職業に期待される役割を良くも悪くも超えた状態だったためであり、稲川氏のやり方が桐生高校で持続可能なものではなかったことに由来する。

結果的に、稲川氏の功績をまとめた書籍でも野球人としての評価を超えてはおらず、社会全体に大きな影響を与えた偉人という捉えられ方ではないように思う。稲川氏の活動は野球

の競技の本質を捉えるという点では「探究」だったと思うが、高校の監督という範囲を超えて野球という文化で社会問題を解決しようと志向したわけではない。あくまでも桐生高校の野球部で甲子園制覇を成し遂げたかったのであり、桐生市のまちづくりをしたかったわけではない。

だからこそ「遊び」を純粋に探求していたとも言えるのだが、現代社会でスポーツに求められている価値はもう一つ先にある。例えば、2025 年 6 月に国会で成立した「改正スポーツ基本法」では、前文でスポーツとの関わり方に従来の「する」「みる」「支える」に加えて「集まる」「つながる」という定義が追加された。

スポーツと文化芸術との連携で人々の創造性が育まれることを期待する点や、健康で活力に満ちた長寿社会を実現する役割も新しく書かれており、広い機能が明記されている。また、スポーツ産業を起点に新たな国のルール、仕組みの在り方を検討している「一般社団法人スポーツエコシステム協議会」ではスポーツの中心的な価値を「関係価値」と定義し、様々な人や組織との関係性を育むことがスポーツの価値の根源と捉えている。

「遊び」に興じる全員がスポーツを通して社会問題を考える必要は必ずしもないとは思ものの、このような国や産業界の方向性もある中で、野球をきっかけにまちづくりを進めていく球都桐生プロジェクトとしては、スポーツを含めた文化活動をきっかけに社会問題に興味を持ち、解決に導ける人を増やしたい。「遊び」が制度に縛られることは本末転倒だが、社会に有用な「遊び」と捉えられているからこそ自由にスポーツ活動ができるという側面もある。スポーツを含めた様々な文化活動を愛する我々には、せっかく持っているスポーツの社会的な機能を主体的に考え、日常の身近な問題の解決につなげていく姿勢が求められる。

私は NHK-BS で今年 12 年目を迎える球辞苑に長年出演させていただいたが、最も印象に残っている視聴者の声に「野球はよくわからないのですが、楽しそうにマニアックな内容を語り合っているのを見るのが楽しい」というコメントがあった。実際、球辞苑では収録の現場で出演者の皆さんが心底楽しそうに語り合っている。

そこに社会問題を解決しようという崇高な理念はない。それでも「小学生の時から球辞苑を見ていて、自分もスポーツを分析する人になりたいと進路を決めました」と言われる機会が増えてくると、こちらも勝手に責任を感じることもある。すると、球辞苑を通して社会的な影響を考えた振る舞いが増えてくる。今回のような調査レポートを書きたくなる。自分の中でもまさに「遊び」→「探求心」→「探究」があったと感じている。

「遊び」が「探求心」を育み、社会とつながることで「探究」へと昇華し、社会の価値を創造する。想定をはるかに上回る勢いで人口が減少する社会の中で、野球をきっかけに桐生市のまちづくりを進めている球都桐生プロジェクトが目指すのはまさにここだろう。

野球をきっかけとした「創造都市」への期待

創造性をシステムとして研究した心理学者のチクセントミハイは、創造性は個人(individual)、領域(domain)、場(field)の相互作用から構成されるとしている。つまり、個人的に何か新しいアイデアを考え、実行するだけでは創造性は十分に発揮されず、その個人が活動できる専門領域があり、専門家に批評、認知される場があることで初めてその活動が創造的であると認められるということだ。

この点で、様々な専門家が集い、意見を交わす場のある球都桐生プロジェクトは私にとっても創造性を発揮する好機だ。桐生市民ではなく、稲川氏から教えを受けたわけでもない私のリサーチがどのように評価されるか。

稲川氏が野球人としてだけでなく、クリエイターとして見られるかどうかは、私が自分の中で書き留めているだけでは完成せず、球都桐生プロジェクトの関係者や桐生市民に批評されて初めて成り立つ。そして、今後はその創造性を地元を愛する桐生の方々や、未来を担う子どもたちにこそ発揮してほしい。球都桐生プロジェクトを通した様々な人の交流が10年、20年と続けば、将来の桐生市の姿が変わる可能性がある。

ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)は文化の多様性を保持するとともに、世界各地の文化産業が潜在的に有している可能性を都市間の戦略的連携により最大限に発揮させるための枠組みとして「創造都市ネットワーク」の事業を進めている。

「文学、映画、音楽、工芸、デザイン、メディアアート、食文化」の7分野で、世界でも特色のある都市を「創造都市」として認定する制度となっており、日本でも札幌市などが加盟している。この枠組みには残念ながらスポーツのジャンルはないのだが、桐生市が野球の文化をきっかけにまちづくりを進めようとする取り組みは、まさに「創造都市」のような動きだと考えている。

実際、半世紀以上前に稲川東一郎という変わり者が一代で球都の礎を築いた歴史があり、その歴史を受け継ぎ全国でも珍しいまちづくりの施策を実行してしまう文化が桐生にはある。そもその土台には「織物の街」として1000年以上、創造性を発揮してきた偉大な歴史もある。「遊び」を探求する市民と、熱量が生まれるきっかけを拾い、サポートし続ける球都桐生プロジェクトからどのような人物や取り組みが生まれてくるか。桐生市が野球をきっかけに「創造都市」として羽ばたいていくことを期待したい。

<参考文献(書籍・雑誌・野球殿堂博物館)>

- ・「尾張メモ」の全貌 情報は盗んで活かせ

https://bml.opac.jp/opac/Holding_list?rgtn=100002769

- ・週刊ベースボール 1965/3/1～4/26

https://bml.opac.jp/opac/Holding_list?rgtn=100007052

- ・山紫に 桐生高校野球史

https://bml.opac.jp/opac/Holding_list?rgtn=100005271

- ・週刊朝日臨時増刊 1960 年 8 月 15 日号 第 42 回高校野球甲子園大会

https://bml.opac.jp/opac/Holding_list?rgtn=100020477

- ・週刊朝日増刊 1967 年 8 月 15 日号 第 49 回高校野球甲子園大会

https://bml.opac.jp/opac/Holding_list?rgtn=100020484

- ・週刊朝日臨時増刊 1958 年 8 月 15 日号 第 40 回記念号 甲子園大会

https://bml.opac.jp/opac/Holding_list?rgtn=100020427

- ・北国に光を掲げた人々 北海道高校野球の父 飛沢栄三先生

https://bml.opac.jp/opac/Holding_list?rgtn=000005610

- ・北海野球部百年物語 北の球児、闘いの記録 : since 1901

https://bml.opac.jp/opac/Holding_list?rgtn=100004831

- ・週刊ベースボール 1964/5/4～6/29

https://bml.opac.jp/opac/Holding_list?rgtn=100007047

- ・《単独インタビュー》ドジャース大谷翔平が開幕前に明かしていた“究極の打撃論”「ボールを100 の力で潰しにいく」「データに対して解を知る」の真意とは？

<https://number.bunshun.jp/articles/-/865048?page=1>

<参考文献(その他)>

- ・技術革新から捉えた日本の野球アナリティクス史

～①アナリストの役割とスポーツの課題整理～

<https://note.com/canopus84/n/n1058f85c8e21>

- ・群馬の高校野球

https://www.kosho.or.jp/products/detail.php?product_id=510047898

- ・遊びと人間

<https://www.kodansha.co.jp/book/products/0000150521>

- ・クリエイティヴィティ フロー体験と創造性の心理学

<https://sekaishisosha.jp/book/b353656.html>

- ・スポーツ基本法(令和 7 年法律第 71 号)

https://laws.e-gov.go.jp/law/423AC1000000078/20250919_507AC1000000071